グリーンテクノ・農業クラブ　News03

農業女子プロジェクトに参加した様子が，９月 11 日（月）農経しんぽうに掲載されました。

ほ　う　（昭和28年8月6日第3種郵便物認可）　第3191号

茨城で農業女子プロジェクト

井関農機など

初の産学官連携事業

ソバ播種作業実習　商品アイディアソンも

井関農機㈱と東京農業大学及び阿見町は8月25日、茨城県阿見町の君島構造改善センターで、農業女子プロジェクト全国初の産学官連携事業として、高校・大学の女子学生を対象とした常陸秋そばの播種作業及び女性目線の商品開発に関するアイディアソンを行った。これには東京農大の女子大生7人、茨城県立江戸崎総合高校で農業を専攻する女子高生2人が参加した。女子学生らは手押し播種機及びトラクタ作業機によるそば播種作業や、農業女子トラクタ「しろプチ」や耕うん機「ちょこプチ」の実習を体験しそば商品の企画を考え、生産から商品開発まで幅広い学びを得た。

これは農林水産省の農業女子プロジェクトに参画する井関農機（木下榮一郎社長・東京都荒川区西日暮里5の3の14）と東京農大が阿見町（認定農業者連絡会）と連携して行ったもの。

当日は女子学生9名に加え、井関農機及びヰセキ関東、東京農大、阿見町、県の農業改良普及センター、江戸崎総合高校など関係者ほか、地域の認定農業者も集まり、総勢40名ほどが参加。開会にあたり、阿見町産業建設部長・湯原幸徳氏は「全国初となる産学官連携の農業女子の取り組みということで、体調に気を付けながら実習に励んでほしい。町長も阿見町に井関農機・茨城センターがあるので、農業の振興のために井関と一緒になってやることが重要と期待している」と挨拶。

また、東京農業大学准教授・平野繁氏は「阿見町、井関農機、東京農大の3つの連携に農業女子プロジェクトという柱が入って、今日に至った。3者と農業女子が発展するために、今日はいいスタートになる」と期待を寄せた。

また、今回の開催趣旨について東京農業大学助教・小川繁幸氏が「農大はより若い世代にもっと農の魅力を感じてほしいという意図で農業女子プロジェクトに参加している。阿見町は都心から近く、井関のような企業もあるなど非常に立地が良く、産学官の連携で女性をターゲットにした取り組みに魅力ある場所。今回全国初の取り組みの1発目を行い、阿見町の新たな特産品になるものを農業女子として発信していきたい」と語った。

阿見町農業振興課農政係長・浅野裕治氏によると、阿見町は平成25年度より耕作放棄地を活用した常陸秋そば産地化に取り組んでおり、27年度に16㌶だった作付面積は28年度33㌶、29年度53㌶予定と着実に拡大。昨年にはヰセキ関東とも連携して機械化によるソバ播種・収穫を行い、ソバの増産・品質向上に取り組んだ。「連携をより強化してさらなるソバの産地化に取り組みたい」としている。

参加者の自己紹介の後、女子学生によるソバ播種作業が行われた。女子学生らはトラクタの安全講習を受けた後、2つの班に分かれて、ソバ播種作業及び、トラクタ・耕うん機の作業を実習。ソバ播種は、種まき機「ごんべえ」による手押し播種を行った後、トラクタ＋播種機による機械作業を体験。井関トラクタ「RESPA」RTS22が施肥播種機「さざけ号」を力強く牽引し、均等に効率よく播種する。作業能率は1日50㌶。女子学生たちは「まっすぐ走るのや旋回が難しい」と言いつつも、手押し播種に比べた機械播種の効率の良さに感心していた。また、トラクタ・耕うん機の実習では、井関農機が農業女子プロジェクトで開発したトラクタ「しろプチ」とミニ耕うん機「ちょこプチ」を体験。それぞれ慣れない耕うん機のエンジン始動や直進作業に苦労しながらも、練習するうちにコツを会得していった。江戸崎総合高校2年の横田仁美さんは、実習について「トラクタに乗るのは2度目だが、機械実習はなかなかできないのでいい体験。難しかったが面白かった」と感想を語った。食品に興味があり農業を専攻した横田さんは、将来は農産加工や食品製造に進みたいという。

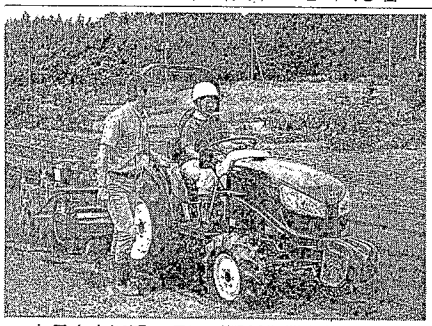
実習後は、井関のソバチームによる、管理機「愛さいか」＋高速播種機「クリーンシーダ」による高速播種の実演を見学。時速6～7㌔、1日2㌶の作業能率を誇る本格高速播種の様子をみな熱心に眺めた。

井関農機営業本部茨城センター所長・藤井晴美氏＝暑い中、学生の皆さんには実習を非常に頑張っていただいた。いろいろな話を聞いて勉強になったならいいと思う。今日だけではなく、今後もご縁として、使っていただければと思う。

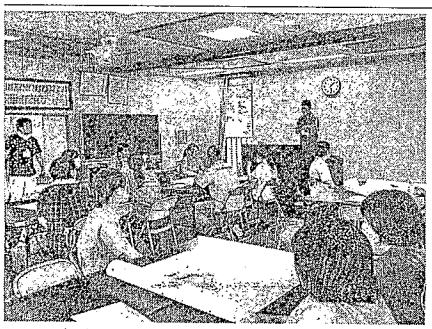
阿見町産業建設部
湯原部長

東京農業大学
平野准教授

井関農機茨城センター・藤井所長



トラクタに乗ってソバ播種作業を体験する女子学生



アイディアソンにてソバを活用した商品を企画した